

The Criticism of the Sphoṣa theory in
Tarkabhāṣāprakāśikā : Centering on the research
for the translation and notes of the portion of the
criticism to the sphoṣa

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-03-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森, 三喜 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/2035

The Criticism of the *Sphoṭa* theory in *Tarkabhāṣāprakāśikā*: Centering on the research for the translation and notes of the portion of the criticism to the *sphoṭa*

MORI Miyoshi

Summary

The *Nyāya-Sūtra* (NS) admits verbal testimony (*śabda*) as the fourth means of cognition (*pramāṇa*) and defines it as the testimony or instructive message of a trustworthy speaker (1.1.7). Moreover, the first *āhnika* of the second *adhyaḥya* of the NS presents a long argument against the doctrine of the permanence of words by the Mīmāṃsā School. However, there seem to be many problems which are not yet dealt with in the NS, but are discussed in later Nyāya works such as the *Nyāyamañjarī*, as Marui [2014] has shown. Therefore, much still remains to be done for the research on the development of Nyāya's discussions of the *śabda-pramāṇa*.

In order to make a small advancement in this research topic, the present paper gives the Japanese translation of the relevant portion of the *Tarkabhāṣāprakāśikā* (TBhP) by Cinnambhaṭṭa, a detailed commentary on the *Tarkabhāṣā* (TBh) by Keśava Miśra. The portion presents a long controversy between the Grammarians and the Naiyāyikas on the nature of a word (*śabda*) and the issue of how to recognize it. The Grammarians who advocate the *sphoṭa*-theory criticize the Nyaya arguments based on the *varṇa*-theory, according to which a word is nothing but the collection of individual letters or sounds (*varṇa-samūha*) and the perceptive cognition of a series of momentary sounds as a word can be justified with the help of a collaborative aid of impression (*saṃskāra*). In order to support their own arguments, both sides sometimes quote from authoritative texts such as the *Mahābhāṣya* of Patañjali, the *Sphoṭasiddhi* of Maṇḍana Miśra, and the *Śloka-vārttika* of Kumārila. It seems that Nyāya's criticism of the Grammarian's arguments is similar on many points to the criticism of them by the Mīmāṃsakas, especially that given by Kumārila. Therefore, it is necessary to research the reflection of the arguments of the quoted texts in TBhP further.

The present paper also points out the necessity of textual criticism of the

(54)

TBhP. TBhP is worth researching as it contains many quotes, but the only presently published text has many problems such as misprints and incorrect choice of words from the manuscripts, and this makes it difficult to read correctly. Therefore, the text of the theory in TBhP should be revised based upon the manuscripts.

Tarkabhāṣāprakāśikā の単語認識をめぐる議論

——sphoṭa説批判の訳注研究を中心として——

森 三 喜

Tarkabhāṣāprakāśikā の単語認識をめぐる議論

—— sphoṭa 説批判の訳注研究を中心として ——

森 三喜

〈キーワード〉 ニヤーヤ学派／シャブダ論／音素集合説／スポータ説批判／
タルカパーシャー・プラカーシカー／和訳研究

はじめに

pramāṇa（認識手段、知識根拠）の一種としての śabda（信頼できる言葉）をめぐる議論（以下、「śabda 論」）は、古くから宗教聖典の権威論証に関わる問題として、インド哲学諸派において盛んに議論されてきた。śabda は独立の pramāṇa たりうるのか、それを承認する場合にも śabda 論の信頼性は如何にして根拠付けられるのか、そもそも言葉の実体とは如何なるものか、単語とは何か、文とは何か、などという問題が、学派間で重要な論点となった。Nyāya 学派においても *Nyāyasūtra* 1.1.7 で「信頼すべき方の教示が śabda である」と定義され、同第 2 章第 1 課では śabda が常住か無常かをめぐる Mīmāṃsā 学派との論争などが展開している。しかしとりわけ後代の Nyāya 学派において、Mīmāṃsā 学派や文法学派と盛んに交わされた論争の詳細は、Navya-Nyāya は別として、先行研究がきわめて乏しい。Jayanta Bhaṭṭa の śabda 論の構成と部分的な内容分析を扱った丸井 [2014] や、同様に Jayanta Bhaṭṭa の音素集合説についての議論に言及する Saito [2017] などにとどまるのが現状である。

そのような研究状況を踏まえて、本稿では Nyāya 学派の代表的綱要書 TBh（推定 13 世紀）に対する Cinnambhaṭṭa（推定 14 世紀）の注釈 TBhP の śabda 論を取り上げる。TBhP はその sphoṭa 説批判を部分的に紹介する Kawajiri [1995] が現状確認されている程度で、これまで学術論文で取り

上げられた形跡は殆どないようである。しかしながら、śabda 論を精査してみると、TBhP は注釈対象である TBh の本文を逐一解説し、前後の脈絡を明らかにするばかりでなく、背景にある重要な議論や他学派との論争を掘り起こし、しかもその際にはしばしば先行テキストからの引用を含む議論を提示している。勿論、TBhP におけるこうした拡張的な議論・論争の提示が、実際に歴史的に展開した śabda 論をどれほど忠実に反映しているかは別問題であろう。しかし少なくとも Nyāya 学派の śabda 論の展開史解明に資する高い学術資料的な価値が、TBhP には見込まれると思われる。そのような理由から、さしあたり本稿では TBhP における śabda 論の拡張的な議論の中で、最も詳しい sphoṭa 説批判を主意とする単語認識をめぐる議論を取り上げ、該当箇所のと訳提示を中心としてその議論構成と内容を明らかにしたい。

I. *Tarkabhāṣā* での単語認識をめぐる議論

まず TBhP の注釈対象である TBh の śabda 論の議論構成であるが、以下の7つに分類される。(1) śabda の定義、(2) 文意認識成立のための三要件(論争を含む)、(3) 文の確定定義、(4) 単語の定義及び単語認識の成立過程、(5) 文認識の成立過程、(6) 文が śabda という認識手段となる条件、(7) 世間的文と Veda 文、この中で最も詳しいのは(2)であり、主として対論者との問答形式から成る。他方、本稿で中心的に扱う TBhP の単語認識をめぐる議論に相当する箇所(4)は TBh では簡潔な叙述にとどまっている。次節で示す TBhP の単語認識をめぐる議論が、TBh の如何なる記述に基づいているのかを明らかにするため、TBh の該当箇所の和訳を以下に示す。

なお依拠した TBh 版本の頁数・行数と原文を括弧内に記す。また、複数の長い修飾語が伴う際には修飾語を 〈 〉 で、被修飾語はイタリックで示した。

(4) 単語の定義及び単語認識の成立過程 (18. 1-7)

「また、単語とは諸音素の集合である。しかしこの場合、「集合」とは一つの認識の対象領域となることである。(padam ca varṇasamūhaḥ/ samūhaḥ cātraikajñānaviṣayabhāvah/)

つまり、順序を持って現れる諸音素は、非常に早く消滅するものなので、一度に複数の音素の直接知（ここは知覚）は不可能であるから、それぞれに先行する諸音素を知覚してから、最終音素を聞く時に、〈それぞれに先行する諸音素の直接知より生み出される潜在印象を伴った〉、〈最終音素との関係を持った〉、〈語の派生 (padavyutpādana) に関する協約の習得 (samayagraha) に補助された〉聴覚器官によって、一度に、現存しているまた現存していない複数の音素を対象としている単語の認識が生み出される。協働因の威力故に。例えば再認識のように。(evam ca varṇānām kramavatām āśutaravināśitvenaikadānekavarṇānubhavāsambhavāt pūrvapūrvavarṇān anubhūyāntyavarṇaśravaṇakāle pūrvapūrvavarṇānubhavajanitasamskārasahakṛtena antyavarṇasambaddhena padavyutpādana-samayagrahānugṛhītena śrotreṇaikadaiva sadasadane-kavarṇāvagāhīni padapratītir janyate sahakāridārdhyāt pratyabhijñānavat/)

何故なら、再認識という知覚に際しては、過ぎ去ってしまった前の状態であっても、まさしく現れるからである。』(pratyabhijñāpratyakṣe hy atītāpi pūrvāvasthā sphuraty eva/)

II. Tarkabhāṣāprakāśikā の単語認識をめぐる議論 (和訳) — sphota 説批判 —

前節にて示した TBh の śabda 論における単語をめぐる議論に対して、TBhP では非常に綿密な注釈が施されている。全体的な構造としては、Nyāya 学派が主張する śabda 論に対して想定される反論を行う対論者が常に想定され、それらの反論に対して Keśava Miśra の示す説明の一つ一つを詳細に解説しながら応答を行うという形式をとっている。議論構成と梗概については別稿¹⁾にゆずる。本稿では TBhP の単語認識の議論をより詳

細に分析するため当該箇所和訳を示し、版本の修正箇所と典籍からの引用箇所とは原文を提示する。

1. 単語の定義及び単語認識の成立過程 (TBhP, 164-171)

1.1. 諸音素の集合が単語であるということについての質疑応答 (164.12-165.6)

【反論】 だがしかし、諸単語の集合が文章であると述べられたが、そもそも単語とは何なのか。

【応答】 そこで [Keśava Miśra は] 述べる。“padam ca” と。

【反論】 だがしかし、単語とは [諸] 音素の集合であると述べられたが、それは成立しない。諸音素が集合となることはありえないからである。つまり、多くのものどもが一つの場所に共存することが直に知られる場合に「集合」という呼称がある。例えば、ダヴァ樹、カディラ樹、パラージャ樹が一ヶ所に共存しているものとして直に知られる場合に「集合」という呼称がある。あるいは例えば、象や人、馬などが [一ヶ所に共存しているものとして直に知られる場合に「集合」という呼称がある]。しかし、先述の諸音素はそうには直に知られない。(諸音素は)生ずるや否や滅するものであるからである。これ故に、諸音素の集合はありえない。

【応答】 以上の反論を想定して、実在する (vāstava) 集合としては不可能であっても、観念上の (bauddha) 集合としては可能であるということ [Keśava Miśra は] 述べる。“ekajñāna” と。

【反論】 だがしかし、一つの認識の対象であることとは、単一の音素であるという認識の対象であるのならば、それはありえない。複数の水瓶に対して一つの水瓶という認識のように、複数の諸音素に対して一つの音素という認識は現れないからである。これ故に、実在するがごとき架空の存在であっても、諸音素の集合はありえない。

【応答】 この反論を想定して、一なる認識の対象というのは一つの単語であるという認識の対象であるということであって、他方、諸音素の場合にもそれはありうるということ在意図して [Keśava Miśra は] 述べる。“evam tatra” を始めとして、(そして) “pardapratītir janyate” を終わりとし

て。“evam”（という語）によって述べられるべき次第によって、単語の認識が生ずるという構文的な繋がりがある。(ato vāstavavat kālpaniko 'pi samūho varṇānām sambhavatīty²⁾ āśaṅkyaikajñānaviṣayatvaṃ nāmaikam padam iti jñānaviṣayatvaṃ tat tu varṇānām na sambhavyaty evety abhipretya parihāraṃ prāha — evaṃ tatrety³⁾ ādinā padapratītir janyata⁴⁾ ity antena/ evaṃ vakṣyamānena prakāreṇa padapratītir janyata iti sambandhaḥ/)

2. sphoṭa 論者による論難とそれに対する応酬 (165.7-168.11)

2.1. 単語認識に対する sphoṭa 論者の主張提示 (165.7-166.4)

【反論】 だがしかし、単一の単語であるという認識は sphoṭa に依存する。またそれに対する認識手段がないわけではない。「知覚」(pratyakṣa) と「論理的要請」(arthāpatti) とが可能であるからである。つまり、「牛」“gaur” というのは単一の単語だという、種々の音素とは異なる単一の単語としての認識が万人に認められるからである。つまり、(前述を) 否定するものがなければ、単語の直接知覚は正しくないと述べることはできない。さもなくば、事物の認識が不可能であることから、sphoṭa は認められるべきである。またもし、あなたが諸音素のみから意味の認識が生ずると考えるのであれば、その場合は諸音素が個々別々の状態で意味を顕現させるのか、それとも総体としてなのかということが答えられるべきだ。

(しかし) 初めの(主張)は否定される。その他の音素が無益なものであるという不都合な帰結に陥るからである。また、それぞれの音素からの意味の認識が経験されないからである。(また) 二番目の主張も同様に否定される。(nādyah itaravarṇavaiyarthaprasaṅgāt/ ekaikasmād varṇād arthapratītir adarśanāc ca⁽⁵⁾ nāpi dvitīyah/) 生ずるや否や滅する諸音素が総体をなすことは不可能であるからである。また、個々別々であることと、総体をなしていることとは異なる様式も不可能である。それ故に、諸音素は意味を表示することはあり得ないので、意味理解をもたらすものとなるのが sphoṭa である。

音素とは異なる、音素によって顕現させられる (abhivyāṅgya)、意味を

認識させる常住な語が sphoṭa である。と、それを知る者たちは述べる。まさにこれ故に、諸音素によって開顕される (sphuṭyate)、すなわち顕現させられる (vyajyate) ということから、[諸] 音素によって顕現させられるものが sphoṭa である。開顕する、すなわち意味がこれより顕になるということから、sphoṭa とは意味を認識させるものであると、sphoṭa という語の意味を両義的に説明する。またそのように、尊者 Patañjali によって *Mahābhāṣya* で述べられている。(varṇātirikto varṇābhivyaṅgyo 'rthapratyāyako nityaḥ śabdaḥ sphoṭa iti tad vido vadanti/ ata eva sphuṭyate⁶⁾ vyajyate varṇair iti sphoṭo varṇābhivyaṅgyaḥ,⁷⁾ sphuṭati sphuṭībhavaty asmād artha iti sphoṭo 'rthapratyāyaka iti sphoṭaśabdārtham ubhayathā nirāhuḥ/ tathā coktaṃ bhagavatā patañjalīnā mahābhāṣye/)

「さて、「牛」「gaur」とはここでは如何なる語 (śabda) であろうか。発声される時に喉袋、尻尾、こぶ、蹄、角を持ったものの正しい認識が生ずるようなもの、それが («牛»)(gaur) という) 語である。またもしくは、そこから事物が認識される音声語であると世間では述べられる。」(‘atha⁸⁾ gaur ity atra kaḥ śabdaḥ/ yenocāritena sāsnālāṅgūlakakudakhuraviṣāṇinām⁹⁾ sampratyayo bhavati sa śabdaḥ/ atha vā pratītapadārthako¹⁰⁾ loke dhvaniḥ śabda ity ucayate¹¹⁾ iti //)

と。それ故に、単一の単語であるという認識は sphoṭa に依存してのことである。

2.2. sphoṭa 論者に対する応答 (166.4-167.7)

【応答】 以上の (sphoṭa を立てる) 文法家の反論を [Keśava Mīśra は] 排斥するのである。“varṇāvagāhinī” と。以下のことが意図するところのことである。

単語の認識は [諸] 音素とは異なる非世間的な sphoṭa という名称を持つものを対象とするものではない。sphoṭa の存在を立証する認識手段が存在

しないからである。(ayam āśayaḥ padapratītir varṇātiriktālaukikasphoṭākhyapadārthāvagāhī¹²) na bhavati sphoṭe pramāṇābhāvāt/) まず知覚はこの場合当てはまらない。“gaur” (「牛」) と述べられた時、“g” 音、“au” 音、visarga の [諸] 音素とは異なる如何なるものも直接知には現れないからである。あなたも目を閉じてよく考えてみよ。“gaur” (「牛」) と述べられる時、諸音素のみが直接知覚される。それらとは異なる如何なるものも [直接知覚され] ない。と、それ故に、sphoṭa に対して知覚は認識手段ではない。また論理的要請も認識手段ではない。諸音素のみから意味理解が論理的に成立することより、論理的要請とは全く別様に論理的に成立するからである。そしてまた、顕現させられた sphoṭa が意味を理解させるのか、それとも顕現させられていない [sphoṭa が意味を理解させる] のか。後者ではない。全ての事物を認識するという結果を生起させるという不合理な帰結に陥ってしまうからである。sphoṭa が常住 (nitya) であることを承認することによって、原因 (hetu) に依らずして常に存在することより、結果が遅滞することは不合理であるからである。またもし、この不都合を避けようとして、顕現させられた sphoṭa が意味を認識させるというのならば、その場合、顕現させつつある諸音素は個々別々に (sphoṭa を) 顕現させるのか、それとも総体として生ずるのか。どちらの場合にしても (sphoṭa 論者である) あなたによって述べられた、諸音素が意味を直接表示するという主張に対する諸々の論理的瑕疵 (doṣa)、まさにそれが (音素は) sphoṭa を顕現させるものであるという主張に対しても差し戻されるべきである。その (主旨の) ことが述べられる。(pakṣadvaye 'pi bhavatā varṇānām vācakatvapakṣe ye doṣā bhāṣitās ta eva sphoṭābhivyāñjakatvapakṣe 'pi āvartanīyāḥ¹³) /)

「部分のない sphoṭa が諸音素の認識によって顕現させられると主張する人も、ただ一つの論難さえも免れない。」(‘yasyānavayavaḥ sphoṭo vyajyate varṇabuddhibhiḥ/ so 'pi paryanuyogena naikenāpi vimucyate/¹⁴)

また同様に、

「双方にとって論理的瑕疵が同じであり、相手の非難に対する論駁もまた同じであるという場合において、一方だけがその種の事柄の考察において非難を受けるべきではない。」(‘yatrobhayoḥ samo doṣaḥ parihāro ’pi vā samah/naikaḥ paryanuyoktavyas tādr̥g arthavicārane//’¹⁵⁾)

以上の理屈から、あなたにとっては沈黙のみが寄る辺である。そしてまた、sphoṭa が理論的に想定されるべきであるし、sphoṭa が意味を直接表示する能力が理論的に想定されるべきである。それよりもむしろ、双方にとって周知の、諸音素が意味を直接表示する能力を想定する方が良いであろう。それ故に、単語の認識は諸音素を対象とするものであり、他方、音素とは異なる兎の角のような sphoṭa を対象とするわけではないということが周知のことである。

2.3. sphoṭa 論者による Nyāya 学説批判 (167.4-168.7)

【反論】 だがしかし、一つの音素に対して単語の認識は生じない。そのようであれば、それだけで意味の理解が論理的に成立してしまうので、他の音素は無益であるという不都合な帰結に陥ってしまうからである。

【応答】 そこで [Keśava Miśra は] 述べる。“aneka”と。

【反論】 だがしかし、最終音素を聞く時に、その他の音素は存在しないということから、どのようにして複数の音素を対象とするのか。

【応答】 この疑問を受けて [Keśava Miśra は] 述べる。“sadasad”と。「現存するもの」(sad) とは最終音素であり、「現存しないもの」(asad) とは先行する諸音素である。という意味である。

【反論】 順次行われるのであれば、現存するまた現存しない複数の [諸] 音素を対象とすることはあるとしても、単語の認識は生じない。

【応答】 この反論を想定して [Keśava Miśra は] 述べる。“ekadaiva”と。現存するまた現存しない複数の [諸] 音素を対象とすることが同時にあるならば、その場合に単語の認識がまさに生ずるという意味である。

【反論】 だがしかし、この種の認識は何を手段として生ずるのか

【応答】 この疑問を想定して [Keśava Mīśra は] 述べる。“śrotreṇa” と。

【反論】 だがしかし、聴覚器官 (śrotra) という感覚器官 (indriya) は現存する対象のみを把握するのであり、現存しない対象を把握はしない。外的な感覚器官であるが故に。一般的に認められている (感覚器官の) ように。

【応答】 この反論を想定して、(聴覚器官に対する) 協働因 (sahakārin) の威力故に、現存しないものの把握も成立するということを意図して [Keśava Mīśra は] 述べる。“pūrvapūrvā” と。目などは再認識されつつあるものを対象として把握するので、あなたの推論には不定因 (anaikāntika) という過誤があるという主旨である。

【反論】 だがしかし、それぞれに先行する音素の直接知によって生み出された潜在印象によって、現存するまた現存しない複数の音素の認識が生ずるということはよしとしよう。(しかし) 単語の認識は如何にして生ずるのか。

【応答】 この疑問を想定して [Keśava Mīśra は] 述べる。“padavyutpādana” と。屈折語尾を終わりに持つ (vibhaktyanta) 諸音素に対して、Pāṇini によっては「格語尾乃至人称語尾で終わる屈折した名詞乃至動詞が単語である。」と、また Gautama によっては「屈折語尾を終わりに持つものが単語である。」と、単語という名称が規定されているからである。(vibhaktyanteṣu varṇeṣu ‘suptiñantaṃ padam’¹⁶⁾ iti pāṇinīnā ‘vibhaktyantaṃ padam’¹⁷⁾ iti gautamena ca padasaṃjñāyā vihitatvāt/) そのような協約の習得 (saṃketagrahaṇa) に補助された聴覚器官によって、他ならぬ諸音素が単語であるという認識が生ずるという主旨である。

【反論】 だがしかし、他ならぬ現存している最終音素を把握すると述べられたが、それはどうしてか。

【応答】 この疑問を想定して [Keśava Mīśra は] 述べる。“antya-varṇa” と。

【反論】 だがしかし、最終音素が直前に聞かれているので、それと関係を持ったものであることはありえない。

【応答】 それに対して[Keśava Miśra は]述べる。“antyavaraṇaśravaṇa”と。

【反論】 だがしかし、如何なる時にせよ、それぞれに先行する諸音素の直接知が生じた上で、その潜在印象に伴われた聴覚器官が複数の音素の把握をなすのならば、それはありえない。そのようには経験的に知られないからである。

【応答】 この反論を受けて[Keśava Miśra は]述べる。“pūrvapūrvā”と。“anubhūya”というこの表現によって、それぞれに先行する諸音素の直接知と最終音素の聴覚が隔たりのないことが述べられんと意図されている。という意味である。

2.4. 音素が常住であると認めればよいという反論と応答 (168.7-11)

【反論】 だがしかし、どうしてこのような苦しい理論的想定をする必要があるか、ともに直接知覚されつつある諸音素に対して、単語の認識が生ずるといっただけで十分である。

【応答】 この反論を受けて[Keśava Miśra は]述べる。“ekadāneka”と。

【反論】 だがしかし、諸音素が常住であるということを承認すれば、同時に複数の[諸]音素の直接知が可能であると想定される。また音素が常住であることを論証する推論も存在する。音声(śabda)は常住なものである。限定されない量を持つ実体(amūrtadravya)であるが故に。例えば虚空(ākāśa)のように。(varṇanīyatve cānumānam asti śabdō nityo ’mūrtadravyatvād¹⁸⁾ ākāśavad iti cet tatrāha - āśutareti/)

【応答】 と、もし以上のように(述べられるの)であれば、それに対して[Keśava Miśra は]述べる。“āśutara”と。属性たることが既に論証されているので¹⁹⁾、理由は不成因である。という意味である。

3. 諸音素の順序認識をめぐる議論 (168.11-169.5)

【反論】 だがしかし、複数の諸音素に対して単語の認識が生ずると述べられたが、その場合“saraḥ”というこの単語に対してある限りの諸音素と同じ限りの諸音素が“rasaḥ”という単語にもある。同様に“vanam”と“navam”、

“nadī” と “dīna”、“māra” と “rāma”、“rāja” と “jāra” などの意味の差異の認識はないはずである。

【応答】 それに対して [Keśava Mīśra は] 述べる。“kramavatām” と。「順序」(kramah) とは前後関係のことであり、そしてそれは生起 (utpatti) を持った諸音素にとって可能であろうということが字義通りの意味である。以下のことが言わんとしていることである。つまり、転倒した (viparīta) 順序を持った諸音素には、(転倒していない順序を持った諸音素と同じ) 意味を表示する能力が認められない。もしそうであれば、非難されるであろうが。そうではなく、(意味を表示する) 能力は結果に基づいて論理的に導出されるものであるから、それらの諸音素から結果が経験されるように、それに即してそれらの諸音素の (意味を表示する) 能力が想定されるのである。そのことが述べられる。

「一定の量の、一定の種類 of 諸音素が、ある意味の表示に対して能力を持つことがよく知られているのであれば、それらがまさにそのように意味を知らしめる。」(yāvanto ye ca yadarthapratipādane/ varṇāḥ prajñātasāmarthyās²⁰ te tathaivāvabodhakāḥ²¹//²² iti/)

と。このような次第によって、その諸々の文章に存在しているものが、発声されるや否や減するものなので同時の直接知は不可能であっても、述べられたところの協働因に伴われた聴覚器官によって複数の諸音素に対する単語の認識が生ずるということである。

4. 音素の集合における単一認識の成立に対する論争 (169.5-171.5)

4.1. 聴覚器官に伴った潜在印象に対する反論と応答 (169.5-21)

【反論】 だがしかし、聴覚器官という感覚器官にはこのような種類の認識を生み出す能力があることは如何にしてそうなるのか。

【応答】 この疑問を想定して、協働因の威力故にそうなる。ということ [Keśava Mīśra は] 述べる。“sahakāridārdhyād” と。

【反論】 だがしかし、それぞれに先行する諸音素の直接知による潜在印象の力に基づいて、聴覚器官という感覚器官が、現存するまた現存しない複数の諸音素を対象として持つ単語の認識を生ぜしめる。と述べられたが、それは理屈に合わない。なぜならば、潜在印象というものはもしある対象(A)の直接知覚から生じた場合には、そのある対象(A)の想起(smarāṇa)を生み出す能力を持っているのであり、それとは別の結果(B)を生み出すことはできない。(nanu pūrvapūrvavarṇānubhavasamṣkārabalāt śrotrendriyaṃ sadasadane kavārṇālambanāṃ padapratītim utpādayatīty uktam tan na yujyate samskārā hi yadvīṣayānubhavasamutpādītās tadviṣayasmarāṇa-sampādanasamarthās tatkāryāntaraṃ kartum na²³⁾ utsahante/) まさにこれ故に、*Sphoṭasiddhi* において(論証に)取り組んでいる Maṇḍana Mīśra は(以下のように)述べる。

「実に潜在印象は、ある存在物のありようの直接知によって生み出された場合、まさにその対象に対する結果を生み出す。これ故に意味に対する認識は形成されない。」(‘samskārāḥ khalu yadvasturūpaprakhyāprabhāvītāḥ²⁴⁾/ phalaṃ tatraiva janayanty ato ’rthe dhīrna kalpate²⁵⁾,//²⁶⁾ iti/)

と。それ故に、潜在印象を伴った聴覚器官が単語の認識を生み出すことは理屈に合わない。

【応答】 この反論が想定されることから、Maṇḍana Mīśra の説く空華のごとき装飾の戯言を一笑に付すのである(viḍambayate)。(というのも)潜在印象に伴われた視覚器官には、想起とは異なる再認識を生み出す能力があることが経験的に知られているからである。(tasmāt samskārasanāthasya śrotrasya padapratītījanakatvaṃ na yuktam iti śaṅkitatvān²⁷⁾ maṇḍanavacanāṃ gaganakusumamaṇḍanād ambaraṃ viḍambayate²⁸⁾/ samskārasahakṛtasya cakṣuṣaḥ smṛtivyatiriktapratyabhijñānajananasāmartyasya²⁹⁾ dṛṣṭatvāt/) また論理に通暁した師によって述べられる。

「確かに潜在印象は想起の原因であることが確定しているが、他の結果に対する能力が妨げられることはない。」(‘yady api smṛtīhetutvaṃ saṃskārasya vyavasthitam/ kāryāntare ’pi sāmārthya tasya na pratihanyate//³⁰⁾ iti/)

と。それ故に、潜在印象に伴われた聴覚器官という感覚器官によって生み出された認識が、再認識のように、現存するまた現存しない複数の存在物を対象とすることが可能であると想定される。という主旨のことを [Keśava Mīśra は] 述べる。“pratyabhijñānavat” と。

4.2. 過去時と現在時とを同時に認識する単一認識は成立しないという反論 (169.21-170.8)

【反論】 だがしかし、「これがかのDevadattaである。」(“so ’yaṃ devadattaḥ”) という再認識が過去と現在とに及ぶ存在物を、(過去を振り返り) 現在のものを認識することはありえない。再認識においては、把握 (grahaṇa) と想起 (smaraṇa) とを本質として持つことより、単一の認識ではないからである。つまり、感覚器官は現前している対象に関係するのである。他方現前していない過去の場所と時とを対象とすることはできない。(na tu³¹⁾ asaṃnihitaṃ pūrva deśāṃ kālaṃ cāvagāhitaṃ śaknoti³²⁾) まさにこれ故に、感覚器官から生じている認識においては、「これ性」(idaṃtā) のみが(対象として) 現れ出ているのであり、「それ性」(tattā) ではない。潜在印象も先行する直接知によって生ぜしめられたものであるから、その対象に関する想起のみを生み出すことができるのであり、現在の場所と時間とを対象とする認識を生み出すことは不可能である。(saṃskāro ’pi pūrvānubhavabhāvitā³³⁾ tadviśayām eva smṛtiṃ janayitum iṣṭe nāparadeśakālavīśayām pratītiṃ/) 従って、そこでは「それ性」のみが現れ出ているのであって、「これ性」は現れ出ない。それ故に、感覚器官はただ現前するもののみを対象とするので、また潜在印象は以前に知覚されたもののみを対象とすることから、「それ性」と「これ性」との両方を対象とする認識が生ずる能力はないから、把握と想起とを本質として持つ二つの知の認識であり、単一の認識ではない。かくして、これでは例にならない。

4.3. 単一の認識は成立しないという反論に対する応答 (170.8-171.5)

【応答】 この反論を想定して[Keśava Mīśraは]述べる。“pratyabhijñāna”と。言わんとしていることは以下の通りである。

「これがかの Devadatta である。」という認識においては、過去と現在との時間に限定された単一なる実在の実相 (vastutattva) が現れる。これ (= 過去と現在の時間に限定された単一なる実在の実相) はこれ (= 認識) の対象とならないということはない。全ての人が現に知っていることと矛盾することから。また、把握と想起とは、単一の対象を対象としない。(grahaṇasmarāṇe ca naikaṃ viṣayam avagāhete³⁴⁾) それ故に、これはまさに単一の認識であると、認識の力によって認められるべきである。その主旨のことが述べられる。

「実に、対象を認める場合に頼るべきは、他ならぬ神聖なる認識のみである。」(‘samvid eva hi bhagavato viṣayasattvopagame³⁵⁾ śaraṇam³⁶⁾)

と。感覚器官と潜在印象とが単一にありうるものがない場合でも、それら二つの結合したものの可能性がありうるからである。それ故に、まさに単一の認識が直接知を本質として持つものである。そして、それを推理する推論式もある。見解の分かれているもの(再認識のこと)は直接知を本質として持つものである。知覚であることから。双方が認めるように。と。この意図によって、再認識とは知覚であると、これは相手の主張を排斥するために「知覚」(pratyakṣa)という語が挿入されている。(anenābhiprāyeṇa pratyabhijñāpratyakṣa³⁷⁾ ity atra paramataṃ nirasitum pratyakṣagrahaṇaṃ prakṣiptam³⁸⁾) それによって、潜在印象に伴われた感覚器官から生じたものであることより、再認識が両方を対象とすることが成立するだろう。また、再認識は知覚となるだろう。対象と感覚器官の力に随順 (anuvīdhāna) するからである。(pratipatsyate ca pratyabhijñānām³⁹⁾ pratyakṣatām⁴⁰⁾ viṣayendriyasāmarthyānuvīdhānāt/) そしてそれ故に、如何なる時も不可能

だというわけではないと、再認識は例示される。例えば、潜在印象に伴われた感覚器官によって生じた再認識が現存しない時と場所とを対象とし、また現存する一つの（特定の）時と場所とをも対象とするように。(yathā saṃskārasahakṛtendriyajanyaṃ pratyakṣajñānam⁴¹⁾ asantaṃ kālaṃ deśaṃ cāvagāhate santam ekaṃ kālaṃ deśaṃ ca/) そのように、単語の認識もまた現存するまた現存しないものを対象とする。と。

Ⅲ. TBhP の単語認識をめぐる議論の分析

以上、TBhP において単語認識をめぐる sphoṭa 論者との論争を提示している箇所を和訳し、適宜版本の原文に修正を施した。本節では以上の議論構成及び内容の検討から浮上した TBhP の単語認識の議論の特徴及びテキスト上の問題点をまとめる。

まず、単語認識をめぐる議論についての特徴であるが、特に以下の2点が挙げられる。

① sphoṭa 説からの批判を中心とした単語認識をめぐる議論

TBh が文意成立の三要件に焦点を当てていたのに対し、TBhP では文の構成要素である単語とは何であり、いかにして認識されるのかという問題について、文法学派の採用する sphoṭa 説とそれに対する Nyāya 学派の音素集合説との論争に紙幅の約半分を費やして、大きく取り上げて紹介している。この論争箇所では、TBh で提示された単語の定義に対する sphoṭa 説側からの疑念や反論に対して、Keśava Mīśra の言外の意図を明示するという形で、sphoṭa 説からの批判に対して応答しており、またそこに付随する議論の背景となる論争をも掘り起こしつつ解説している。

② Kumārila の sphoṭa 説批判を前提とした音素説の構築

上述したように、Cinnambhaṭṭa は sphoṭa 説側からの批判に対する応答という形式で TBh の採用する音素集合説を解説していくが、その際に Mīmāṃsā 学派の Kumārila の ŚV からの引用が多く見られる。このことから、Cinnambhaṭṭa の解説する Nyāya 学派の音素集合説は、sphoṭa 説に対

する批判が前提とされており、またその論拠には相当程度 Kumāriḷa の sphoṭa 説批判に依存しているということが窺われる。加えて、Maṇḁana Miśra の *Sphoṭasiddhi* を引用していることは Kumāriḷa 以降の śabda 論までを踏まえて言及していることも見て取れる。しかしどの程度引用元の文献の議論が TBhP に反映されているかは現時点では明らかでないため、引用元まで辿っての検討が必要である。

他方、テキスト上の特徴については、以下の2点が浮かび上がった。

③ Nyāya 学派及び他学派文献の相当量の引用

TBhP では、上述したように sphoṭa 説批判に際して ŚV からの引用や、対して sphoṭa に類する概念が古くから存在したことの論拠として MBh からの引用が行われている。また過去時と現在時との認識の問題に関しては Śālikanātha の PP が引用されるほか、Kumāriḷa の sphoṭa 説批判に対する再反論として Maṇḁana Miśra の SS からの引用が行われている。その他、小稿では扱わなかった箇所であるが、pramāṇa としての śabda の適用範囲に関連して聖典の権威性論証を提示する箇所では、最高的人格的存在である主宰神による著述であるという立場から主宰神論証に関して Patañjali の YS や Udayana の NKus、Kanāda の VS からの引用を行なって解説を行なっていることが確認されている。文献引用の総数は17点におよび、śabda 論に割かれているページ数が15ページであることを考えれば、その数は相当量であると言える。また、対論者側への応答の論拠として権威あるテキストを引用するだけでなく、対論者側の反論にも同様にテキストを引用して反論の根拠としている点は、śabda 論をめぐる議論の背景にある論争を知る上で、いかなる言説がその基礎となっていたのかを知る手がかりとなる。このような議論の背景にまで言及し、文献引用を提示する綱要書や注釈書は非常に稀であり、それ故これは TBhP というテキストに特別な価値を持たせる重要な特徴であると言える。

④ 誤植・不適当な読みなど看過できないテキスト上の問題

分析に際してテキストの講読を行なった結果、小稿で取り扱わなかった śabda 論に関する箇所も併せて軽微な修正も含めた場合、別の異読を採用

すべき箇所が 16 ケ所、解読上不適当であり修正すべき箇所が 24 ケ所の総数 40 ケ所にのぼった。現在流通する TBhP の版本は Bombay Sanskrit and Prakrit Series から出版されているものが唯一であるが、この版本は併録されている TBh のテキストに関しても劣悪である。TBhP の持つ学術資料としての価値から、写本に基づいた修正が急務であると考えられるため、今後写本を入手の上、テキストの再検討を行う予定である。

IV. 今後の問題

以上、TBhP の単語認識をめぐる議論の箇所の分析を通じてその特徴について分析した。分析を通して現在残されている問題として、まず上述した流通版本のテキスト問題があり、写本を前提としたテキストの再検討が必要であることが挙げられる。加えて、本稿では取り扱わなかった箇所に示される引用一点の引用元が現時点ではトレースできていないため、引用元の追跡が必要である。その他、提示されている引用テキストまでをたどって検討することで、その元となるテキストの議論が TBhP の中でどの程度反映されているのかを検討する必要がある。これらの問題については、今後の課題とする。

註

- 1) 『印度学仏教学研究』71 卷（号数未定）に掲載予定の拙稿「『タルカパーシャール・プラカーシカー』の śabda 論—単語認識をめぐる議論を中心として—」
- 2) sambhavaty] Bf; na sambhavaty B
- 3) TBh 原文では "evaṃ ca" であるが、Cinnambhaṭṭa が基にしたテキストでは "tatra" であった可能性がある。
- 4) janyata] em.; na janyata B
- 5) ca/] em.; ca nāpi B
- 6) sphuṭyate] est. by the editor of B.; sphotyate B
- 7) ,] em.; / B
- 8) atha] em. based upon MBh. ; ayaṃ B. cf. MBh, pp. 5-6

(72)

- 9) sāsñālāṅgūlakakudakhuraviṣāñinām] em.; sāsñālāṅgūlakakudarvuraviṣāñānām B
- 10) pratītipadārthako] em.; pratītipadārthako B
- 11) MBh, pp. 5-6
- 12) varṇātiriktālaukikasphoṭākhyapadārthāvagāhinī] em.; varṇātiriktālaukikasphoṭākhyapadārthāvagāhinī B
- 13) āvartanīyāḥ] est. by the editor of B.; vyāvartanīyāḥ B
- 14) ŚV, sphoṭavāda 91
- 15) ŚV, śūnyavāda 252
- 16) A, 1.14.14
- 17) NS, 2.2.60
- 18) 'mūrtadravyatvād] Bf; 'dravavyatvād B
- 19) TBhP, 124.14-18 にて、シャブダが虚空の属性であることが論証されている。
- 20) prajñātasāmarthyās] est. of the editor of B ; prajñānasāmarthyās B
- 21) tathaiivāvobodhakāḥ] em. based upon ŚV, sphoṭavāda 69 ; tataivāvarodhakāḥ B
- 22) ŚV, sphoṭavāda 69
- 23) na] em.; B omits na
- 24) yadvastrūpaprakhyāprabhāvitāḥ] em. based upon SS, 6; yadvastrūpaprakhyāvibhāvitāḥ B
- 25) kalpate] em. based upon SS, 6; kalpyate B
- 26) SS, 6
- 27) śaṅkitatvān] em. for the rule of Sandhi; śaṅkitatvāt B
- 28) viḍambayate] Bf; vilambayate B
- 29) smrtivyatiriktapratyabhijñānanasāmarthyasya] em. smrtivyatiriktapratyabhijñānananam sāmartyasya B
- 30) ŚV, sphoṭavāda 102
- 31) na tu] em.; nanv B
- 32) śaknoti] em.; na śaknoti B
- 33) pūrvānubhavabhāvitā] est. by the editor of B; pūrvānubhavabhāvinas B
- 34) grahaṇasmarāṇe ca naikam viṣatam avagāhete] Bf; grahaṇasmarāṇena cānekaviṣayam avagāhate B
- 35) “viṣayasattvopagame” can be emended into “viṣayatattvopagame”
- 36) PP, 77.5
- 37) pratyabhijñāpratyakṣa] em.; pratyabhijñānam pratyakṣa B
- 38) prakṣiptam] Bf; parikṣiptam B
- 39) pratyabhijñānām] Bf; pratyabhijñānasya B
- 40) pratyakṣatām] Bf; pratyabhijñā B
- 41) pratyabhijñānam] Bf; pratyakṣajñānam B

略号及び一次文献

- A** : *Aṣṭādhyāyī* Vasu, S. C. 1980. *The Aṣṭādhyāyī of Pāṇini*. vol. 1. Delhi: Motilal Banarsidass.
- MBh** : *Mahābhāṣya* Abhyankar, K. V. 1975. *Patañjali's Vyākaraṇa-Mahābhāṣya Āhnikas 1-3 with English Translation and Notes*. Research Unit Publications, No.1. Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute.
- NS** : *Nyāya-Sūtra* Tarkatirtha, Amarendramohan. 1985. *Nyāyadarśanam with Vātsyāyana's Bhāṣya, Uddyotkara's Vārttika, Vācaspati Miśra's Tātparyaṭīkā & Viśvanātha's Vṛtti*. Calcutta: Munshiram Manoharlal Publishers Pvt. Ltd.
- PP** : *Prakaranapañcikā* Sastri, Subrahmanya. 1961. *Prakaraṇa Pañcikā of Śrī Śālikanātha Miśra with Nyāya-Siddhi*. Banaras Hindu University Darśana Series No.4. Banaras Hindu University.
- SS** : *Sphoṭasiddhi* Iyer, K. A. Subramania. 1966. *Sphoṭasiddhi of Maṇḍana Miśra (English Translation)*. Deccan College Building Centenary Series 25. Poona: Deccan College.
- ŚV** : *Ślokavārttika* Śāstrī, Swāmī Dvārikādāsa. 1978. *Ślokavārttika of Śrī Kumārila Bhaṭṭa with The Commentary Nyāyaratnākara of Śrī Pārthsārathi Miśra*. Ratnabharati Series – 3. Varanasi: Ratna Publications.
- TBh** : *Tarkabhāṣā*
Kulkarni, Narayan Nathaji. 1953. *Tarkabhāṣā (Exposition of Reasoning) by Keśava Miśra*. Poona Oriental Series, No.17. Poona: Oriental Book Agency. (底本)
Iyer, S. R. 1979. *Tarkabhāṣā of Keśava Miśra Edited with Translation, Notes and an Introduction in English*. Gokuldas Sanskrit Series No. 36. Varanasi: Chaukambha Orientalia.
- TBhP** : *Tarkabhāṣāprakāśikā* Bhandarkar, Devadatta Ramkrishna. 1979. *Tarkabhāṣā with the commentary Tarkabhāṣāprakāśikā of Cinnamḥaṭṭa*. Bombay Sanskrit and Prakrit Series, LXXXIV. Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute.

二次文献

- Bhattacharya D. C. 1972. *An indian Rational Theology, Introduction to Udayana's Nyāyakusumāñjali*. Delhi: Motilal Banarsidass
- Jhā, Gangānātha. 1985. *Ślokavārttika [Formerly Published as Ṣlokavārttika]*. Bibliotheca Indica No. 146. Calcutta: The Asiatic Society.

(74)

2005. *Tarkabhāṣā or Exposition of Reasoning*. The Vrajajivan Indological Studies 57. Delhi: Chaukhamba Sanskrit Pratishthan.
- Kawajiri Michiya. 1995. “Criticism of Sphota in the Nyayakandali and the Tarkabhasaprasika.” 『印度学仏教学研究』 43 (2)
- Marui Hiroshi (丸井 浩). 2014. 『ジャヤンタ研究—中世カシミールの文人が語るニヤーヤ 哲学—』. 山喜房仏書林.
- Potter, Karl H.
1974. *Bibliography of Indian Philosophies*. The Encyclopedia of Indian Philosophies. India: Motilal Banarsidass.
1977. *Indian Metaphysics Epistemology: The Tradition of Nyāya Vaiśeṣika up to Gaṅgeśa*. The Encyclopedia of Indian Philosophies. Delhi: Motilal Banarsidass.
- Saito Akane. 2017. “On the Theory of Phonemes Conveying the Sentence Meaning”. 『印度学仏教学研究』 65 (3)

令和4年度科学研究費補助金基盤研究(B) 21H00472
「インド哲学における「無」の思想」による研究成果の一部

(武蔵野大学大学院博士後期課程)